

1.木津川河床遺跡採取の土器（I）

資料課長 久保哲正

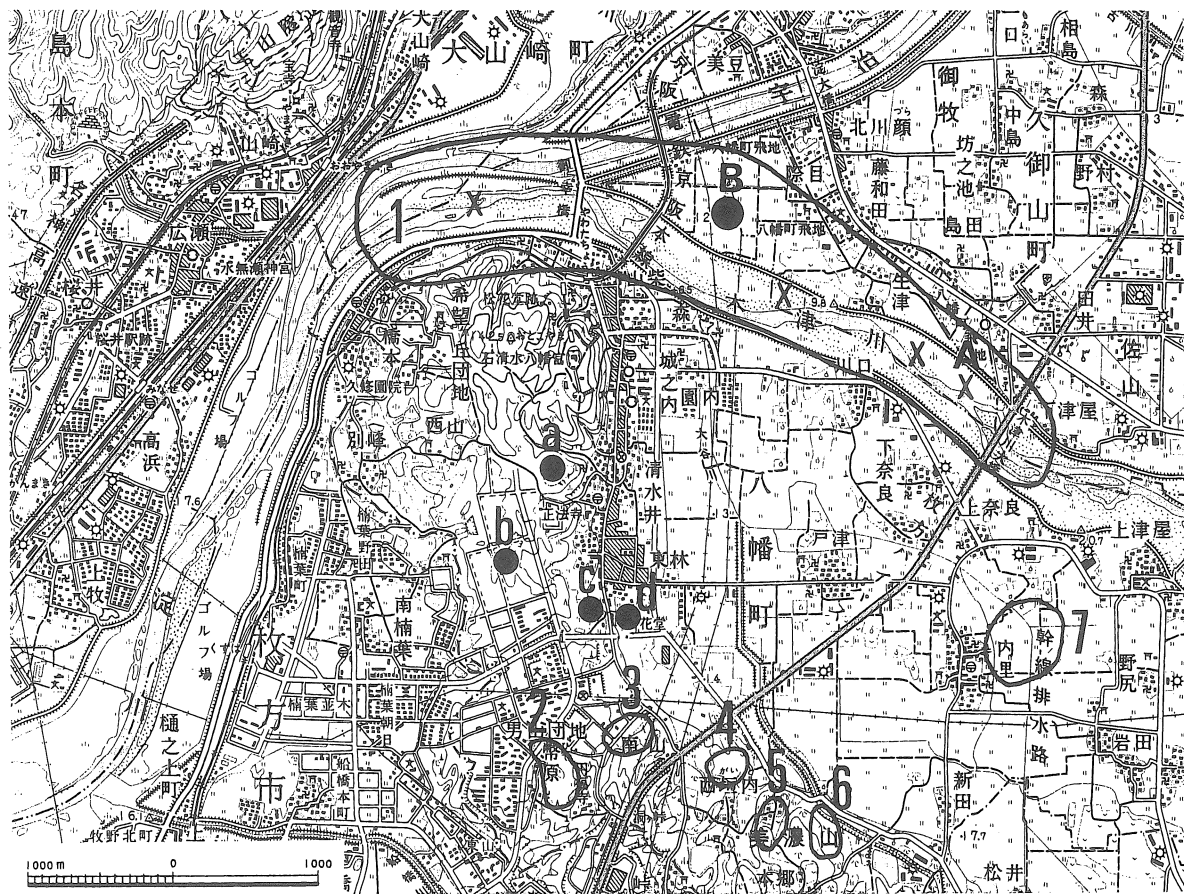
1. はじめに

南山城地域をほぼ南北に貫流する木津川は、八幡市の北側において桂川、宇治川と合流し淀川となって大阪湾に注ぐ。ところで、この三川合流地点は、近世までは現在より北方の淀付近にあった。これが明治3（1871）年に洪水対策のため、それまで北流していた木津川を現在の国道1号線付近で西側に流し、直接淀川に結ぶという工事が行われた。この工事によって、現在、木津川の流路となっている地域に営まれていた古代以来の集落跡が川底に沈んだ。この付近の木津川河床で数多くの遺物が出土するのはこのためで、川が増水する度に集落跡から洗われて採取されている遺物は、縄文時代から近世に至る長期に及ぶ

もので、この付近に大集落があったことが想像される。木津川河床遺跡と呼称されるこの遺跡の実態については、その中心が河川敷に入るため、一部発掘調査が実施されている地点を除いて、不明な部分が多い。^(注1)

当資料館では、木津川河床遺跡採取資料として多くの方々から寄贈を受け、順次整理作業を行っているところであるが、今回報告する資料は平井三千彦氏からの寄贈資料のうち、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての資料を中心に選んだものである。

長岡京市在住の平井氏は、鍼灸医院を開業される傍ら、長岡京市文化財保護審議会委員を務められる郷土史家で、上のような状況にある木津川河床遺跡へ長年にわたって足を運



第1図 木津川河床遺跡遺物採取地点

- a:石不動古墳 b:茶臼山古墳 c:西車塚古墳 d:東車塚古墳
1:木津川河床遺跡 2:幣原遺跡 3:南山遺跡 4:幸水遺跡 5:金右衛門垣内遺跡 6:狐谷遺跡 7:内里八丁遺跡

ばれ、大水の後、川水に流される一方の遺物を丹念に採取されてきた。平井氏は、単に資料を採取するだけに終わらず、その採取地点を日付と共に克明な記録にとどめておられ、遺構に伴わない採取資料ではあるが、各時代ごとの群構成を推定できる可能性もあり、この遺跡の復原的研究を行う上で極めて貴重な資料といえる。今回の報告資料についても、第1図に示した木津川河床遺跡という広い遺物散布状況を呈する遺跡の中でも×印の付近から集中して採取されており、この時期の遺跡・遺構の存在が予想される。

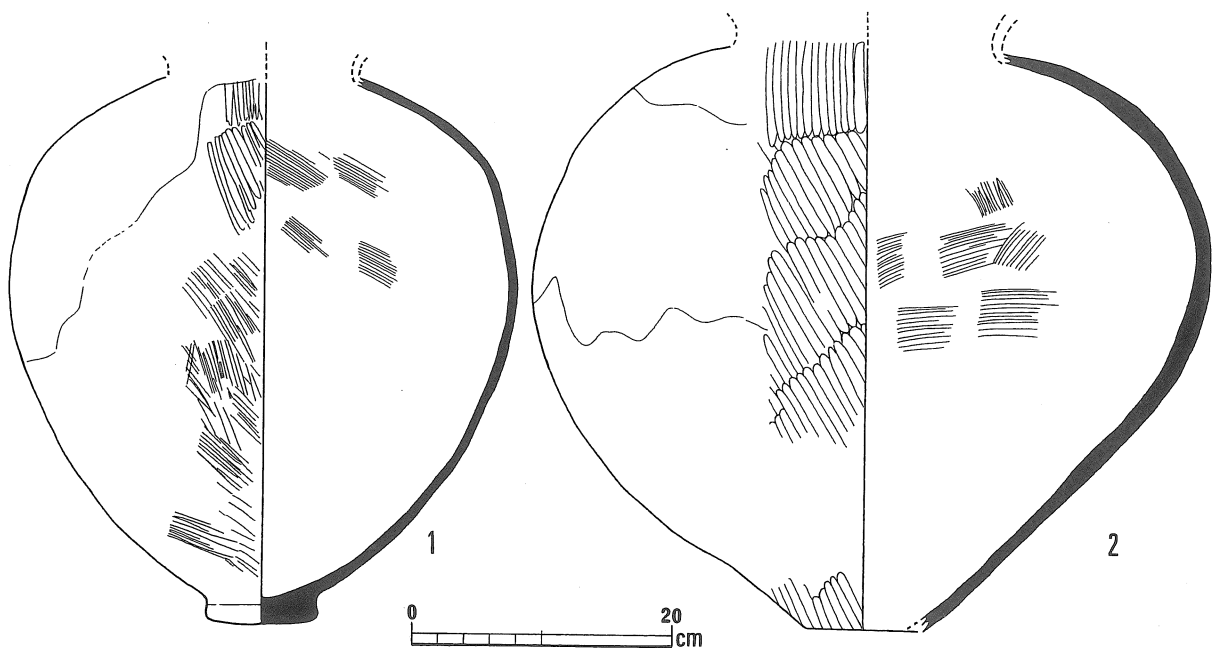
2. 採取土器の概要

第2図の2点の壺は、出土遺構については不明であり、採取時点では2個体とも細片となっていたが、原位置をあまり動いていなかった模様で（第1図×印A付近）、復原の結果、ほぼまとまったものとなった。

1は、頸部から底部まで遺存しているものの、体部の半分が失われていた。色調は、淡黄褐色を呈し、肩から胴部にかけての一部に黒斑が見られる。卵形の体部には不安定な底

部が付く。残存高は41.4cm、頸部での径14.6cm、底径8.4cmで、体部の最大径は肩部より少し下方にあたり、38.2cmを測る。体部外面は、頸部から肩部にかけて右下がりのヘラミガキ、それより下方にはハケの調整が認められる。内面には、まばらなハケ調整が見られる。調整痕は、内外面とも、磨滅を受けているため遺存状況は不良である。頸部の遺存状況から、口縁部については、焼成後に打ち欠いている可能性もある。

2は、復原の結果、口縁部を失っているものの、頸部から底部までが完形となった。色調は、頸部から体腹部までが黄褐色、それより下方は淡赤褐色を呈し、肩部の一部に黒斑が見られる。球形に近い体部には不安定な底部が付されるものと思えるが、最底部については、欠失している。残存高は44.5cm、頸部での径20.4cm、体部最大径50.2cmを測る。調整痕の遺存状況は、内外面とも不良であるが、体部外面にはほぼ全面にヘラミガキ、内面には粗いハケ調整が認められる。口縁部については、1の壺と同様に、焼成後に打ち欠いている可能性がある。この2つの壺については、



第2図 土器実測図(1)

その胎土等から、河内地方、生駒西麓地域からの搬入品である可能性が高い。

以上が、この2個体の弥生式土器の概観である。いずれも弥生時代の後期に属する壺と考えられるが、復原後の形状に興味深い点が認められる。その点について少し触れておきたい。

上でも少し述べたように、1、2の土器とも焼成後に口縁部や、底部を打ち欠いている可能性がある。遺跡における表面採取品であるということから、速断はできないが、土器の破片の遺存状況が比較的良好であるにもかかわらず、二つの土器とも、口頸部の破断面が他の部分に比べて古いと思える。2の壺底部についても、穿孔されている可能性が高いと思える。もし、この想像が許されるなら、この2個体の土器は、壺棺であった可能性が出てくる。その場合、1の壺については、遺存状態のように、使用当初から半裁され、2の壺に対する蓋として利用されていたかもしれない。

上の2点の土器については、採取時の状況や復原後の形態から土器棺という特殊な用途が想像されたため、やや詳細に触れた。以下については第3、4図に図示した壺、高杯、甕、鉢等について簡単に触れて行きたい。

壺（3～11、23～26）

壺は、大きく7タイプ程に分かれる。3・6は、ほぼ球形の胴部に平底が付され、6の底部はくぼみ底となっている。3の口縁部は、ほぼ「く」の字に外反し、外面頸部と肩部に2条の櫛状の工具による刺突文が巡る。外面底部付近にかすかなヘラミガキ痕、内面では底部がタテハケ、胴部より上半はヨコハケが認められる。復原口径11.8cm、器高17.0cmを測る。6は、口縁部を欠くもののほぼ完形で、胴部下半に焼成後の穿孔がみられる。外面頸部から肩部にかけてかすかなタテハケが認められ、内面には底部付近にタテハケ、胴部下半にヨコハケ、ナナメハケが遺存するが以外

は不明である。残存高10.0cm。

4は、球形の胴部に受口状の口縁をもつが胴部より下半は欠く。内外面とも調整は不明である。口径10.1cm。近江系に属するものか。

5は、短頸壺で卵形の胴部に不安定な平底が付され、やや外反ぎみに直立する短い口縁部をもつ。調整は、内外面とも不明である。口径8.6cm、器高14.4cm。

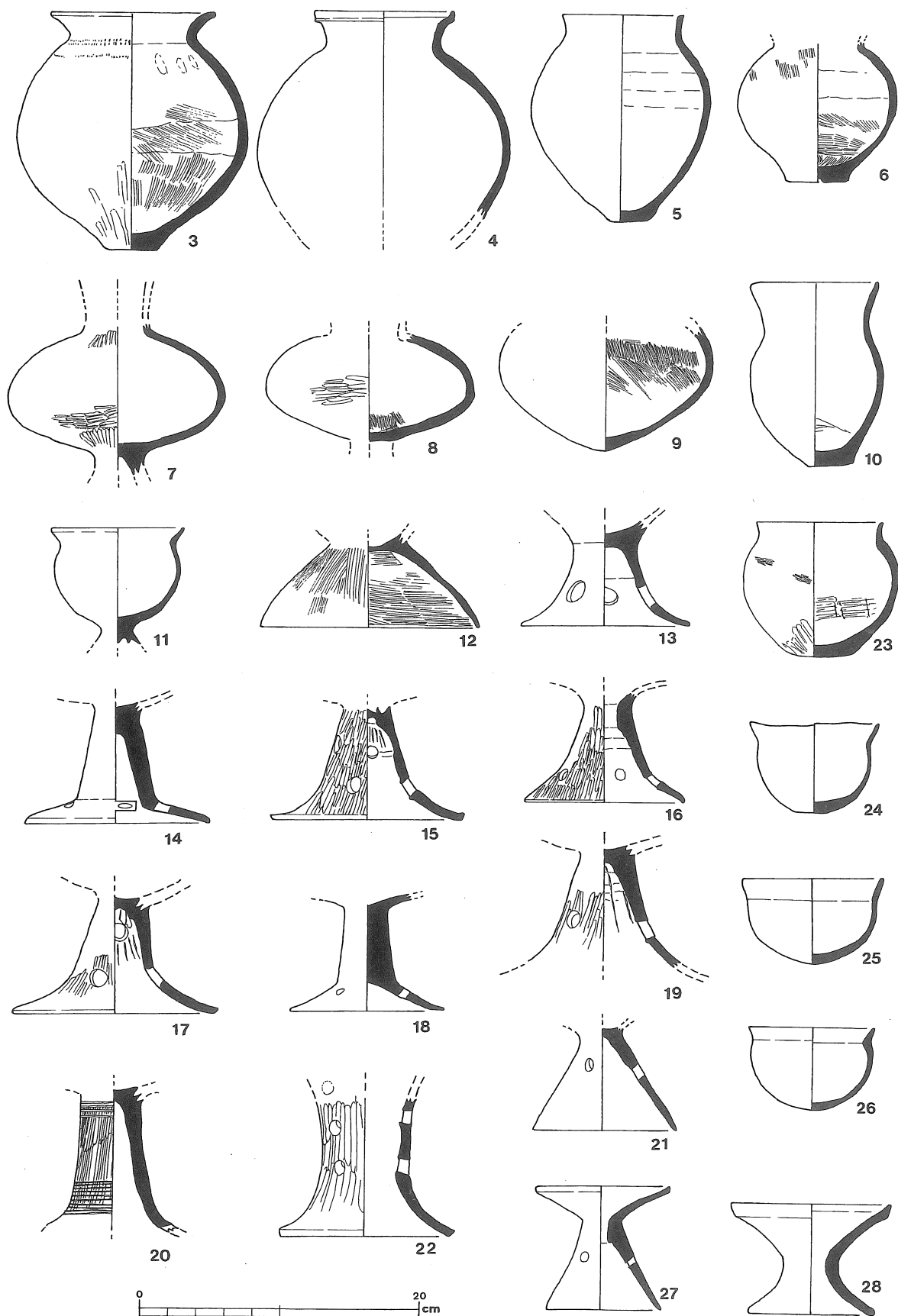
7～9は、細頸壺と思われ、7、8は脚付の細頸壺である。いずれもたまねぎ形の球形胴部だけが遺存している。7は体部外面にかすかなヘラミガキ痕が見られる以外、調整は不明である。残存高10.5cm、最大腹径15.5cmを測る。8は体部外面にかすかなヘラミガキ、内面底部に不定方向のハケがみられる。残存高7.5cm、最大腹径15.0cm。9は肩部より上半が欠けているが、ここでは細頸壺としてとりあげた。尖底状を呈する不安定な形態である。調整痕は、内面上半のナナメハケが遺存するだけで以外は不明である。残存高8.2cm、最大腹径15.3cmを測る。

10は長頸壺で、丸みを帯びた体部に不安定な平底が付き、やや外反ぎみにのびる口縁部を持つ。口径9.2cm、器高13.2cm。

11は小型の脚付短頸壺で、球形の胴部にやや外反する短い口縁部が付き、口縁端部はやや外湾ぎみにつまみあげる。脚部の形状は不明である。口縁部は内外面ともヨコナデ、外面胴部にはヘラミガキ、内面底部付近にはハケの痕跡がそれぞれかすかに認められる。口径9.5cm、残存高8.4cmを測る。

23は外面にススが付着することから甕として使用されたと思えるが、ここでは小型の短頸壺として取り上げた。球形の胴部に直立した短い口縁部が付き、不安定な平底を呈する。外面底部付近にヘラミガキ、腹部に右下がりのタタキメがかすかに認められる。口縁部は内外面ともヨコナデ、内面はナデで調整されている。復原口径9.1cm、器高9.8cmを測る。

24から26は小型丸底壺である。形態的には



第3图 土器实测图(2)

似通ったもので、球形の胴部にやや外反する短い口縁部が付く。底部については形骸化した平底の付く24や尖底状の25、丸底になる26とに分かれる。いずれも磨滅が著しく、調整の痕跡については内外面とも不明である。24の口径9.2cm、器高6.5cm、25の口径10.2cm、器高6.1cm、26の口径8.9cm、器高6.0cmをそれぞれ測る。

高杯等脚部 (12~21)

12は台付鉢もしくは台付壺の台部と思える。内面の下端を若干内側に肥厚させる。外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整されている。台部径15.7cm、残存高6.8cmを計る。

13~21は高杯の脚部である。いずれも杯部は欠失しているが、脚の成形で4種ほどに分類される。13、15~17は比較的短い中空の脚柱部に脚裾部が付加され、杯部をのせる際に上部から粘土が充填されたものと推定される。いずれにも脚柱部と脚裾部の接合を示す段や指オサエ痕が明瞭に遺存する。14、19、20はなんらかの芯をあてて脚柱部が成形され、低い円盤状の脚裾部が付加されたものと思われるが、20については中空の脚柱部に上部から粘土が充填されたものと推定される。18は棒状の脚柱部に低い脚裾部が付加されたものと思われる。21は円錐形の脚を一体で成形する低脚タイプのものと思われる。

13の調整痕は不明。3孔が穿たれる。底径12.1cm、残存高7.8cm。14は調整痕不明。脚裾部に4孔が穿たれる。底径13.2cm、残存高8.9cm。15は外面にかすかなヘラミガキが認められるが、内面は脚柱部の成形時のシボリ痕以外不明である。上下2段に3孔ずつ、6孔が穿たれる。底径13.9cm、残存高8.3cm。16は外面にヘラミガキ、内面の裾部にヨコハケの後ヨコナデ、脚柱に成形時のシボリ痕がそれぞれ認められる。また、脚柱の頂部から粘土が充填されたことを示す痕跡が明瞭に遺存する。脚裾部に5孔が穿たれる。底径11.5cm、残存高8.2cm。17は外面にかすかなヘラ

ミガキ、内面にはヨコナデ。上下2段に3孔ずつ、6孔が穿たれる。底径14.5cm、残存高8.7cm。18は調整痕不明。脚裾部には3孔が穿たれていたものと推定される。復原底径11.2cm、残存高8.5cm。19は外面にかすかなヘラミガキ、内面は脚柱部の成形時のシボリ痕が認められる。3孔が穿たれる。残存高8.5cm。20は脚柱部のみ遺存しているが、外面ヘラミガキの後、頸部に4条、柱下部に10条のそれぞれヘラ描沈線文が施される。柱下部に3孔が穿たれる。残存高10.3cm。21は内外面とも調整不明。脚上半に3孔が穿たれる。底径10.4cm、残存高7.5cm。

器台 (22、27、28)

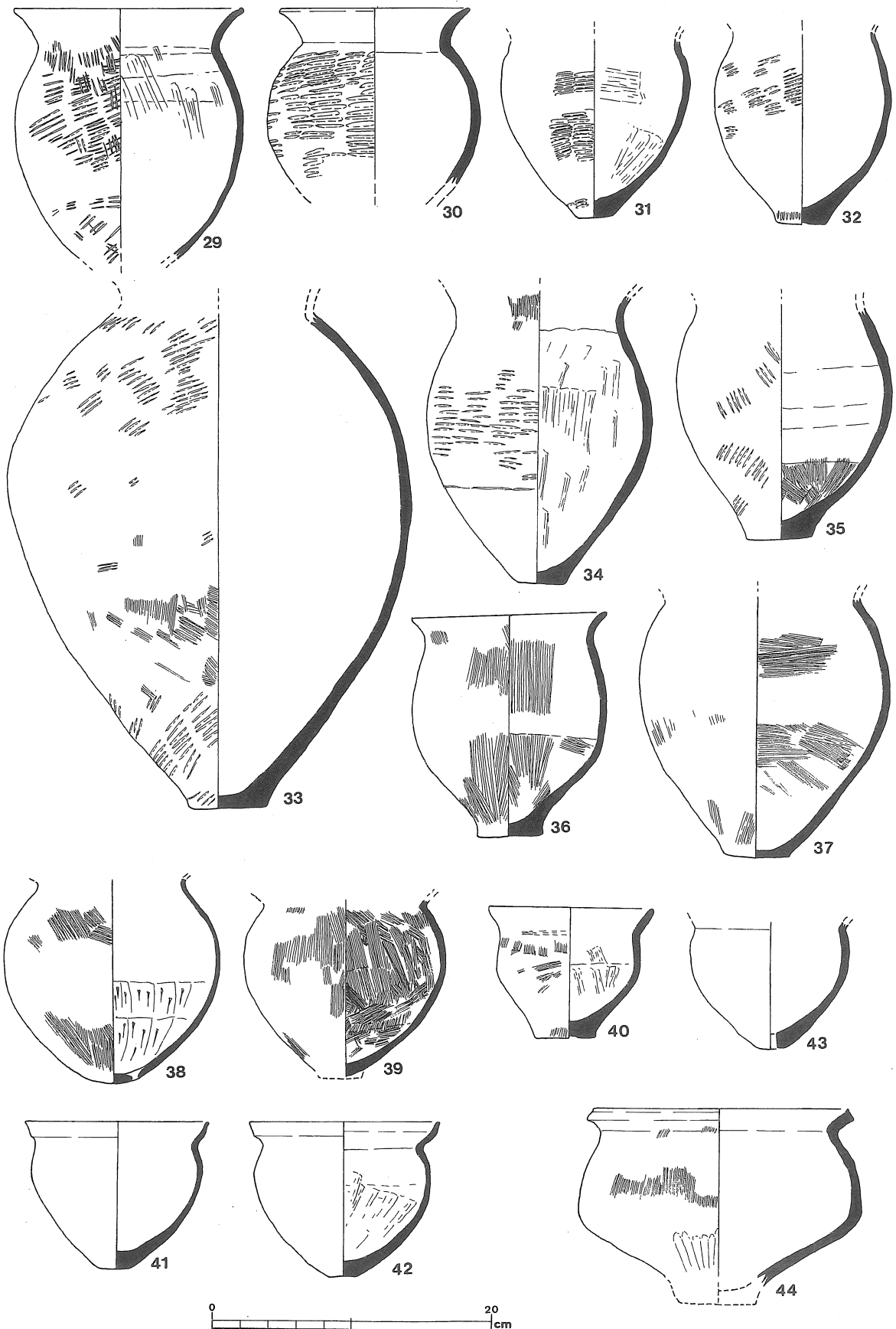
大形の器台 (22) と小型丸底壺の器台 (27、28) とがある。

22は、筒部があまり締まらない形で、筒部に穿孔位置をそろえて3段3孔ずつの円孔が穿たれる。外面にかすかなヘラミガキ痕が認められる以外は調整不明である。復原底径12.7cm、残存高9.8cm。27は、ななめ上方にのびる受け部の端部に面を持たせる。脚部に3孔が穿たれる。調整は内外面とも不明である。口径9.7cm、復原底径8.3cm、器高9.0cm。28は、ななめ上方にのびる受け部の端部をつまみ上げる。調整は内外面とも不明。復原口径11.6cm、底径9.1cm、器高8.0cm。

甕 (29~42)

甕は、縦長の球形胴部を呈するもの (29~37) が大半を占め、底部が遺存しているものでは不安定な平底となる。ほかにほぼ球形胴部で、尖底状を呈するもの (38、39) や小形のもの (40)、卵形の胴部にかすかな平底が付されるもの (41、42) がある。口縁部の遺存する29、30では、外上方に短く立ち上がる口縁部の形態を示し、31、40ではゆるやかに屈折する「く」の字状口縁となる。41、42は、受け口状の口縁部となる。調整痕は、いずれも不明瞭なものが多い。

29は、外面全面にタタキ目が見られ、底部



第4图 土器实测图(3)

付近は右上がり、胴部は水平方向に近い右上がり、頸部は縦方向のタタキ目となる。内面は、板状工具による縦方向のナデがかすかに認められる。口径16.5cm、残存高17.5cmを測る。30は、外面全体に水平方向のタタキ目が認められる以外は調整不明である。口径14.0cm、残存高12.5cm。31は、外面に横もしくは少し右上がりのタタキ目、内面には底部から胴部にかけて縦方向のナデ、胴部上半には横ナデがいずれもかすかに認められる。残存高12.5cm、底径2.5cm。32は、底部の外面中央がくぼむ。外面胴部から肩部にかけて右上がりのタタキ目、胴部から底部にかけてタタキの後、タテハケがかすかに遺存する。内面は調整不明である。残存高13.5cm、底径3.5cm。33は、大型の甕で、外面底部および肩部に右上がりのタタキ目、胴部下方にタタキの後ハケ目がかすかに認められるが、それ以外は内外面とも調整痕不明である。残存高35.0cm、底径5.7cm。34は、底部と胴部、頸部が分割して成形されたことがわかる明瞭な接合痕が残る。外面は接合痕を境にして底部がへら削り、胴部から肩部がヨコタタキ、頸部がタテハケとなる。内面は板状工具による縦方向のナデが認められる。残存高20.5cm、底径3.9cm。35は、外面底部付近に右上がりのタタキ目、内面底部にタテハケがかすかに認められる。残存高15.0cm、底径4.8cm。36は、やや突出する底部を有し、内外面ともタテハケで内面の同部に一部ナデが認められる。復原口径14.4cm、器高16.5cm、底径4.9cmを測る。37は、外面底部付近にかすかなタテハケ、内面では胴部にヨコハケが認められるが、全般的に調整痕は摩滅のため不明瞭である。残存高18.0cm、底径4.7cm。

38は、ほぼ球形の胴部で丸底に近い尖底状を呈する。底部に径0.3cm程の小孔が、焼成後に穿たれている。外部はほぼ全面にタテハケ、内面はへら削りで仕上げられる。残存高14.3cmを測る。39は、ほぼ球形の胴部で尖底

状を呈するが、かすかに平底が付されていた痕跡を止める。外面はタテハケ、内面は上半がタテハケ、底部付近は不定方向のハケで仕上げられている。残存高12.0cm。この38、39については、河内地方、生駒西麓地域からの搬入品である可能性が高い。

40は、小形の甕で比較的しっかりしたくぼみ底が付く。外面は口縁部にヨコナデ、肩部と底部にタテハケ、胴部に右上がりのハケがいずれもかすかに認められる。内面はかすかなナデの痕跡だけで調整痕は不明である。復原口径12.1cm、底径4.5cm、器高9.2cmを測る。

41は、内外面とも摩滅のため、調整痕は不明である。復原口径13.0cm、器高10.5cmを測る。42は、内面に板状工具による不定方向のナデの痕跡が認められるが、外面は調整不明である。口径13.5cm、器高11.0cmを測る。41、42の甕については、受け口状の口縁部やその器形等から近江系のものと思われる。

鉢 (43、44)

43は、形態的には口頸部を欠失した甕と思えるが、ここでは有孔の鉢として取り上げた。底部中央に焼成前の段階で径0.7cm程の孔が穿たれている。内面にかすかなナデの痕跡が認められる以外は調整については不明である。残存高9.0cmを測る。44は、底部を欠くがそれより上部はほぼ完形である。「く」の字に近い体部からななめ外方へ屈折する短い口縁部が付き、口縁端部の上端をややつまみあげて受け口状の形態となる。摩滅のため、調整痕はほとんど見えないが、外面底部付近にへらミガキ、胴部上半にタテハケがかすかに認められる。近江系の鉢と思われる。口径18.0cm、残存高12.5cmを測る。

3. まとめにかえて

以上、簡単に紹介してきた土器は、いずれも年代的には弥生時代後期終末から古墳時代

初頭に位置付けられるものばかりと思える。今回紹介した木津川河床遺跡採取土器は、冒頭でも説明したように平井三千彦氏が第1図に示した付近から採取した資料のみであり、寄贈された資料全体の時代的な区分としては弥生時代から近世までの長期に及ぶ土器類が含まれている。これらの資料を順次報告する予定の第1報として、年代的に古いものから取り上げたのであるが、今回の報告資料より年代をさかのぼるものはほとんど含まれていなかった。

その場合、広い範囲が遺物散布地として周知されている木津川河床遺跡の中でも、今回報告資料の採取地に近接して面的な発掘調査が行われた場所として第1図B地点がある。^(注2)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが行ったこの調査によると、古墳時代を中心にした集落跡が検出されているが、その集落の形成開始時期は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてと想定される。この状況から、表面採取という恣意的な形での資料であることから不確実な要素が多分に残るが、資料採取地点である×印地点を包括した範囲の中に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期から営まれる比較的大きな規模の集落跡が眠っている可能性は高いものと思える。^(注3)

この遺跡に近い木津川左岸の八幡丘陵は、茶臼山古墳や石不動古墳、東車塚古墳、西車塚古墳等の前期古墳が多く分布する地域として知られている。しかし、これらの古墳造営を支えたであろう八幡丘陵周辺におけるこの時期の集落については、まだまだ、未解明な部分が多く残されている。そうした中で、弥生時代以降の遺跡として、幣原遺跡や金右衛門垣内遺跡、狐谷遺跡等といった弥生時代でも後期までを中心とする集落跡と、南山遺跡、木津川河床遺跡、内里八丁遺跡、幸水遺跡等といった古墳時代初頭を前後する時期の集落や墳墓を含む遺跡との判別が、近年の発掘調査の進展につれて、徐々に明らかにされてき

^(注4)ている。これらの調査成果からみても、木津川河床遺跡の規模や実態の解明は、この地域における古墳時代の幕開けを考える上で重要な鍵を握るものと思われる。今回の報告資料は、遺構に伴わない表面採取資料ではあるが、遺跡の分布範囲を推量する手掛かりを示すものであり、今後、この遺跡を研究する上での参考資料として、とりあえず個別土器の概要報告としておきたい。

(注1) 本遺跡採取資料の報告としてまとめたものとしては、a 松村茂「木津川河床採集遺物」『京都考古』第66号、京都考古刊行会1992、b 川上誓作・中世土器研究会「淀川・木津川河床の採集資料」『中近世土器の基礎的研究Ⅸ』日本中世土器研究会1993等が知られる程度である。

(注2) 木津川河床遺跡の発掘調査については、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターによって昭和57(1982)年度から平成3(1991)年度まで断続的に実施され、それぞれ、『京都府遺跡調査概報』第8、11、16、19、23、30、38、49冊として年度ごとの報告書が刊行されている。

(注3) 注1 aの報告からもその可能性が高いことがうかがえる。

(注4) 木津川河床遺跡周辺の弥生～古墳時代にかけての遺跡の消長については、a 岩松保「木津川河床遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第30冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、1988)やb(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターによる内里八丁遺跡に関する近年の一連の発掘調査の成果やc 八幡市教育委員会による幸水遺跡の発掘調査等によって徐々に明らかにされつつある。